どんな時代でも開国し続ける大好きなまち下田

静岡県立下田高等学校　二年　磯崎仁

「景色は抜群に美しくなにより気候も人もあたたかいまち下田」

私は今、下田で育つことができてこの上なく幸せだ。時の流れに翻弄されながらも活気溢れる下田で・・・・・・・

下田は江戸時代、アメリカのペリー氏が来航し、ロシアのプチャーチン氏も来航し一躍「開国の町」となった。また下田にはアメリカ元大統領のカーター氏も訪れるなど、下田は再び世界に名を広げた。現在では「サーフィンの町」として下田中学校に全国でも二番目となるサーフィン部が設置され、下田市だけでなく市外さらに県外からもサーフィンをやりたい中学生やその家族やサーファー達が移住をしてきている。

海だけに留まらず蓮台寺の枝垂れ桃の花まつりや、爪木崎の水仙まつり、またあじさい祭など観光まつりや、黒船祭、下田八幡神社例大祭、また白浜神社例大祭など歴史や文化の祭りなどいろいろなイベントが海の話題に引けを取られないほど積極的に行われている。

しかし時代の変化により下田を訪れる観光客数は最盛期と比べ大きく減少している。また、私が小学生の時二万人以上いた人口も今では二万人を割ったと聞き非常に驚いた。

だからといって下田はまだ捨てたものではない。「下田はやばいから将来は都会に出たい」という人が多い現状に私は「勿体なさ」を感じる。私は自分が小学生だった頃と比べて活気が戻りつつあり、将来的に少子高齢化による人口減少の影響を受けながらも活気溢れる下田になっているだろう。そう思う理由として二つの大事な要素が下田にはあると堂々と言える。

一つ目は「下田をなんとかしよう」というこころざし大きな大人がたくさんいることだ。

例えば、下田の伝統的な祭りを後世にも受け継ぐために時代に沿った祭りのあり方を必死に模索し、実行し、そして改善点を出し次年の祭りを良くしようとする人。クリスマスの日、子供達のために新しいイベントを行った人達や、下田だけでなく世界中の子供達の幸せを願い毎年ハンドベルを打つ保育園の先生方、少しでも観光まつりを盛り上げようとする下田市観光協会や下田市役所などの方々など、伝えきれないほどの大人達が「下田をなんとかしよう」としている。私も「下田をなんとかしょう」としている大人にできる限り協力したい。その関係からその思いが何代も何代も続いていく良いサイクルが出来れば下田に活気は自然と戻る。何より「下田をなんとかしよう」と思う人が多いことが下田に活気が出てきた証拠であると私は考える。

二つ目は他のまちにはない珍しい新しい広報戦略が構築されつつあることだ。

かつて旅番組や歴史番組、さらにはドラマやＣＭ撮影などさまざまな日本のテレビを通じて度々取り上げられていた下田は他地域にはない圧倒的な知名度を手に入れたと思う。しかし現代ではＳＮＳの広い普及によりインスタグラムややユーチューブなどで知名度を得ることが重要になってきている。下田はどうであるのか、現状どちらとも知名度を上手く

得ることができていないと思う。
ＳＮＳでの知名度を上げることができれば、「誰もが心を開く、開国のまち」が伝わり、訪れてくれる人もたくさん増えるのではないかと私は考える。
　私は今年「デジタルノマド（パソコンを使った仕事をして、場所に縛られず遊牧民のように旅をしながら働く人)」を初めて耳にした。実際、今年彼らを呼び込み地元の人たちとのつながりを作ることで「もう一度訪れたい」場所を作ることを目標とする取り組みが行われた。私もわずかながらデジタルノマドさん達と交流できた。お互いに言語の壁がある中でもなんとかコミュニケーションをとろうとすると完全ではないがお互いに伝え合うことができた。たった一日しか交流できなかったが、私には決して忘れることのできない経験となった。デジタルノマド達個々で知名度があり、発信をしてもらえればさまざまな国や地域からたくさんの方々が訪れ、知名度が上昇するかもしれない。何よりデジタルノマドが下田に訪れ、言葉で言い表せないほどの下田の魅力や下田の人のあたたかさに触れて『また訪れたい』と思い、実際に再び訪れてもらえるかもしれない。
「こころの開国」とはまさにこのことではないだろうか？
　私は「変わり続けるものが生き続けるもの」であると思う。下田は時代に合わせて進化し新たに開国をし続けるまちだ。今、少子高齢化による人口減少がかなり痛いが、こころざし溢れて進化しようとする今の下田は活気が出てきていると私は思う。美しい景色、なにより気候も人も暖かい下田をずっとずっと守り伝えていきたい。
時の流れに翻弄されながらもその時に合わせ開国（＝進化）し続けるまち、それが下田である。開国し続けることは大変だが何十年、何百年、何千年と下田は開国し続けるだろう。